

資料

# 新型コロナウイルス感染症の流行期における他の呼吸器感染症 届出数等との比較

## Comparison with the Number of Other Respiratory Infections Reported during the COVID-19 Pandemic Period

石谷 完二                      眞鍋 佳月                      山本 真実  
濱田 結花<sup>1</sup>                      清武 貴子<sup>2</sup>                      新川 奈緒美

### 1 はじめに

新型コロナウイルス感染症の国内発生が2020年1月16日に確認されて以降、2年余りが経過した。従来型より強い感染力を獲得した変異ウイルスが台頭し、百数年前、世界で大流行したスペイン風邪を彷彿させるようなパンデミックとなった。県内における新型コロナウイルス感染症の週別の届出状況を図1に示した。

今回、本県における新型コロナウイルス感染症の流行中（2020～2021年）と、他の呼吸器感染症の代表的な疾患として、インフルエンザ、結核、百日咳の流行状況との比較を行ったので報告する。

染者の状況」を用いた。

### 2. 2 インフルエンザの報告数

定点把握対象疾患であるインフルエンザの報告数については、感染症発生動向調査システム（以下「NESID」という。）に定点医療機関から報告のあった本県及び全国の数値を用いても良いが、新型コロナウイルス感染症、結核、百日咳が全数把握対象疾患であることから、全数把握対象疾患の近似値として国立感染症研究所が公表している2018年以降の都道府県別インフルエンザのり患数推計値を用いることとした。

### 2 調査方法

#### 2. 1 新型コロナウイルス感染症の届出数

全数把握対象疾患である新型コロナウイルス感染症の届出数については、鹿児島県新型コロナウイルス感染症感染防止対策課の記者発表資料「新型コロナウイルス感

#### 2. 3 結核の届出数

全数把握対象疾患である結核の報告数については、NESIDに県内の全医療機関から届出のあった数値を用いた。

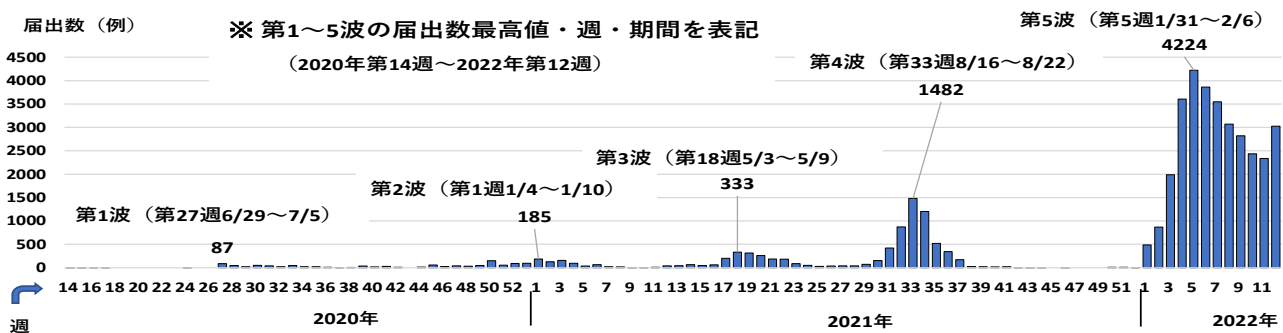


図1 本県の新型コロナウイルス感染症の週別推移（2020年第14週～2022年第12週）

1 鹿児島地域振興局保健福祉環境部  
2 退職（2022年3月）

2. 4 百日咳の届出数

百日咳については、NESIDに県内の全医療機関から届出のあった数値を用いた。

3 結果

3. 1 新型コロナウイルス感染症とインフルエンザの流行状況の比較

本県及び全国の2018～2022年第12週におけるインフルエンザのり患数推計報告数の週別推移を図2に示した。本県における2020年の推計報告数は約5000人、2021年は0人と、この間において大きな流行は認められなかった。

本県における新型コロナウイルス感染症流行前の2カ年（2018～2019年）のインフルエンザ報告数は平均値19850人に対し、2020年の推計報告数は約5000人と74.8%の減少で、2021年の推計報告数は0人とほぼ100%の減少であった。ちなみに、定点報告の数値を利用した場合、2018年、2019年の2カ年の報告数平均値は39839人で、2020年の報告数は11164人と72.0%の減少で、2021年の報告

数は22人と99.5%の減少であった。

3. 2 新型コロナウイルス感染症と結核の流行状況の比較

本県における結核の週別届出数の推移を図3に示した。新型コロナウイルス感染症流行前（2018～2019年）の累積届出数696例と流行中（2020～2021年）の累積届出数486例を比較すると、新型コロナウイルス感染症流行中の結核の届出数は30.2%減少した。

3. 3 新型コロナウイルス感染症と百日咳の流行状況の比較

本県における百日咳の週別の届出数の推移を図4に示した。百日咳は2018年から定点把握対象疾患から全数把握対象疾患となった疾患である。2019年の届出数728例に対し、2020年は90例で87.6%の減少、2021年は4例で99.5%の大幅な減少となった。

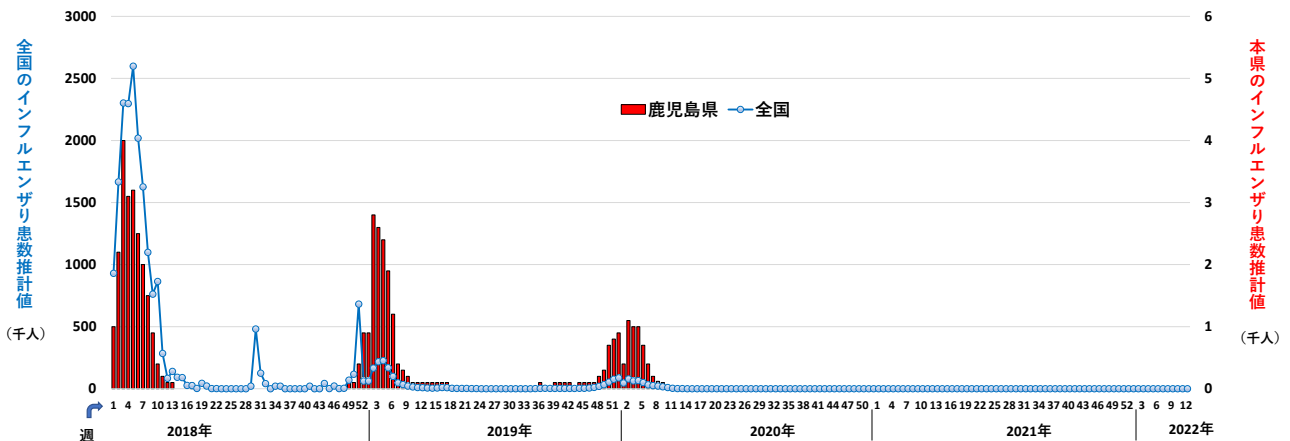


図2 本県および全国のインフルエンザり患数推計報告数の週別推移（2019年第1週～2022年第12週）

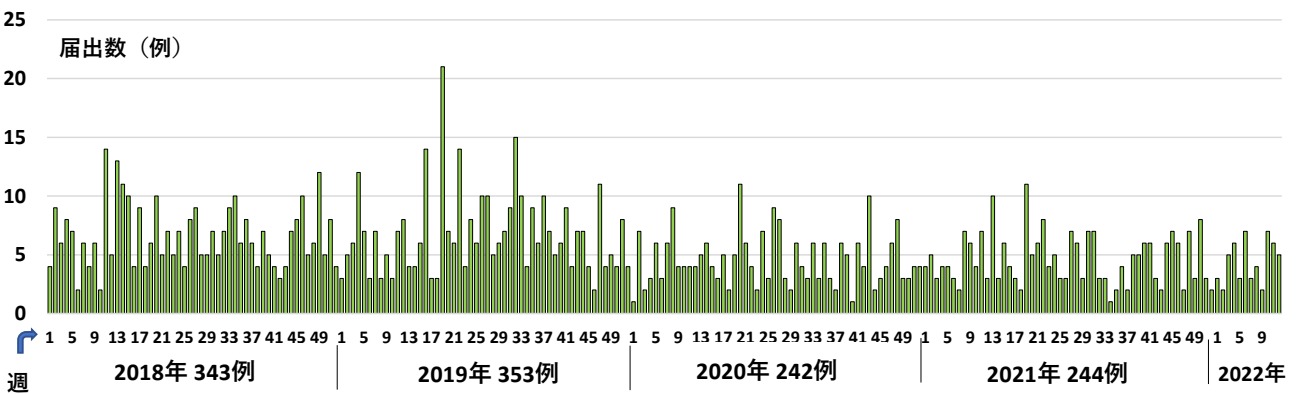


図3 本県における結核の週別推移（2018年第1週～2022年第12週）

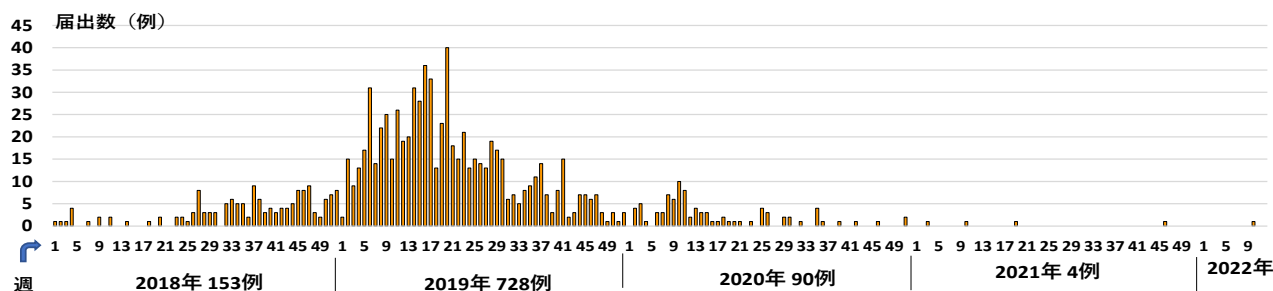


図4 本県における百日咳の週別推移（2018年第1週～2022年第12週）

#### 4 考察とまとめ

中華人民共和国の武漢市で発生した新型コロナウイルス感染症は、従来型から変異を繰り返し、イギリスで確認されたアルファ株、インドで確認されたデルタ株、南アフリカ共和国で確認されたオミクロン株と、より強い感染力を獲得した変異株が次々に登場した。

新型コロナウイルス感染症の感染防止のために講じた基本的な感染防止対策（手洗い、手指消毒、マスクの着用、3密の回避等）が他の呼吸器感染症の流行に影響を与えるか調べたところ、以下のことが推察できた。

1) インフルエンザのり患数推計値は新型コロナウイルス感染症が拡大し始めてから、その対策の波及効果により、低値を推移しているものと推察できた。その他の要因としては、新型コロナウイルスは変異を繰り返していく中で、潜伏期間、ウイルスの排出のピーク等が変化した<sup>1)</sup>。インフルエンザウイルスとの競合によりニッチ（生態的地位：エコロジカル・ニッチ）を獲得したものと推察できた。この2つのウイルスの競合は、ニッチが安定するまでは続くものと考えられる。

なお、インフルエンザのり患数推計値を用いた場合と定点医療機関からの報告数を用いた場合では、国立感染症研究所の指摘にあるように、定点医療機関からの報告数の方が高値の傾向にあることがわかった。

2) 結核の届出数は新型コロナウイルス感染症流行中（2020～2021年）約3割が減少した。

結核研究所が行った「2019年と2020年の1月から4月の月報登録数の比較」報告では、定期健診による発見のうち、学校健診、施設健診での減少、さらに、接触者健診による発見のうち、特に家族以外の健診による発見が減少しているとの報告があり、もしもこれらの健診未受診者からの患者発生が増加することがあれば、今後の結核の発生動向に大きな影響を与えるとしている<sup>2)</sup>。

結核は今も日本を含め世界最大級の感染症であり、今後もその動向には慎重に対応する必要がある。

3) 百日咳の年別の届出数をみると、2018年1月1日から感染症法上の五類感染症定点把握対象疾患から五類全数把握対象疾患に変更になったものの、全医療機関からの届出制度が定着しておらず、2018年は153例に止まったと考えられる。2019年は、全医療機関からの届出制度が定着し、新型コロナウイルス感染症の流行の影響も受けず、加えて、基本的な感染防止対策（手洗い、手指消毒、マスクの着用、3密の回避等）を施していない届出数と推察できた。そして、2020年、2021年は新型コロナウイルス感染症の流行下での基本的感染防止対策が浸透し、その実践結果が届出数低下という成果として表れたものと考えられる。

国立感染症研究所の報告書「新型コロナウイルス感染症流行下の国内百日咳の疫学のまとめ」<sup>3)</sup>によると、重症化しやすい乳児を百日咳から守るためには、学童・成人層の百日咳予防対策がより重要としていることから、引き続き学童・成人層の動向に注視したい。

新型コロナウイルス感染症がいつ収束するのか全く予測できない状況ではあるが、今後も疫学情報の収集に努め、新たな感染症によるパンデミック等により、他の感染症の届出数等がどのような影響を受けるのか知見を蓄積し、今後の感染症予防対策につなげたい。

#### 参考文献

- 1) 日本感染症学会；提言「今冬のインフルエンザとCOVID-19に備えて」（2020年12月11日一部改訂版）
- 2) 結核研究所；複十字「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が結核患者登録に及ぼす影響について」（2020年7月号）
- 3) 国立感染症研究所・厚生労働省；病原微生物検出情報（IASR）「新型コロナウイルス感染症流行下の国内百日咳の疫学のまとめ」48, 113～114（2021）